運　城　日　記

2015 年 10 月 30 日～11 月 1 日の日程で、中国柳宗元研究會第七届年會暨國際學術討論會に参加してきた。この学会は、柳宗元ゆかりの地で数年に一度開かれている。第１回は 1993 年に柳州で開かれ、この時、柳宗元研究会が成立。第２回は 2002 年に永州で、第３回は 2004 年に柳州で、第４回は、柳宗元の祖先が住んでいた地（籍貫）、古名河東の山西省永済で、第５回は 2007 年、永州で、第六回は 2013 年、山西省晋城で開かれた。私はこのうち、第３回・第６回は、仕事のつごうで欠席したが、他の５回は参加している。運城も古名河東、柳宗元の籍貫（本籍）の地である。

2015·第七届柳宗元国际讨论会日程表

日期	时间	事项	参加人员	地点
10 月 30 日（周五）	8：00–20：00	学者报到	与会人员	空港度假村
	18：00–19：00	晚餐（自助）	与会人员	空港度假村
10 月 31 日（周六）	7：00–7：30	早餐（自助）	与会人员	空港度假村
	7：30–8：00	乘车去运城学院	与会人员	
	8：00–9：00	开幕式	与会学者/相关领导	学院办公1515
	9：00–9：30	合影留念	与会学者/相关领导	学院办公楼
	9：30–11：30	圆桌论坛（3 组）	与会学者	1505/1308/4
	11：30–12：00	乘车回度假村	与会人员	
	12：00–13：30	午餐（自助）午休	与会人员	空港度假村
	13：30–14：00	乘车去运城学院	与会人员	
	14：00–17：00	分组讨论（3 组）	与会学者	1505/1308/4
	17：00–18：00	参观校园/理事会	与会学者/ 全体理事	校园内/150
	18：00–18：30	乘车回度假村	与会学者/相关领导	
	18：30–19：30	招待晚宴	与会学者/相关领导	空港度假村
	7：00–8：00	早餐（自助）	与会人员	空港度假村
	8：00–8：30	乘车去运城学院	与会人员	
	8：30–10：30	分组讨论（3 组）	与会学者	1505/1308/4

11 月 1 日（周日）	10：30-11：30	汇报发言/闭幕式	与会学者/相关领导	1515
	11：30-13：00	午餐（桌餐）	全体人员	学院学子餐

１０月３０日（金）

１０時のバスに乗った。天下茶屋に１１時前に着。１１時過ぎの、空港行き急行に乗った。12 時前に関空着。カウンターで荷物は北京でいったん取って、38 号返却台にもどしてくれと言われた。しかし、この指示では不十分だった。フライトは CA928。荷物を受け取るのは 37 号。ほとんど終わりのほうにようやく出てきた。となりのベルトが 38 号なのだが、これが返却台かどうかわからない。近づいて確かめようとしたが、よく分からない。何よりも、受け付ける人間がいないから不安。時間もあまりないし、機内持ちこみにすることにした。中国人はこの大きさのスーツケースを、持ちこんでいるからまちがいない。

運城への飛行機は、CA1139。国内転乗の手続きの所に行くと、ずいぶんたくさん並んでいる。空港事務の女性が通ったので、「搭乗券はもうある、どこだ？」と聴くと、３層。ゲートは９。後は順調。18 時に搭乗が始まった。席は後ろのほうで、頭の上の荷物入れに、横にして入れると、「朝外」といわれた。「外」が耳に響いて、下ろすと、アテンダント怪訝な顔をする。で、荷物を縦に入れると「それで、いいか？」。もちろんいいので、「没問題」。荷物のことこれで終わった。なんか、やさしいお姉さんだった。

運城関公空港に*は 20 時１０分、定刻より少し早めに着いた。荷物は持ちこみなので、そのまま出たが、迎えがない。スーツケースを開けて、ホテルの名称と空港から歩いていける場所であることを確認。行こうとしたところに、「下定教授ですか？」と迎えがきてくれた。これが今回の学会実務を取り仕切る運城学院*中文系の万徳敬副教授と教え子の院生だった。ほんとに歩いて５分ほどのところに「運城空港渡假村」があった。

*サイトに拠れば、運城関公空港（044000 中国運城市空港新区关公东街 9 号）は 2005 年に開港された。 現在、国内航空会社 6 社が乗り入れ、国内就航地 13 空港に出航している。 中国国際航空、中国東方航空、中国南方航空、大新華航空、上海航空、深圳航空による運航がされている。

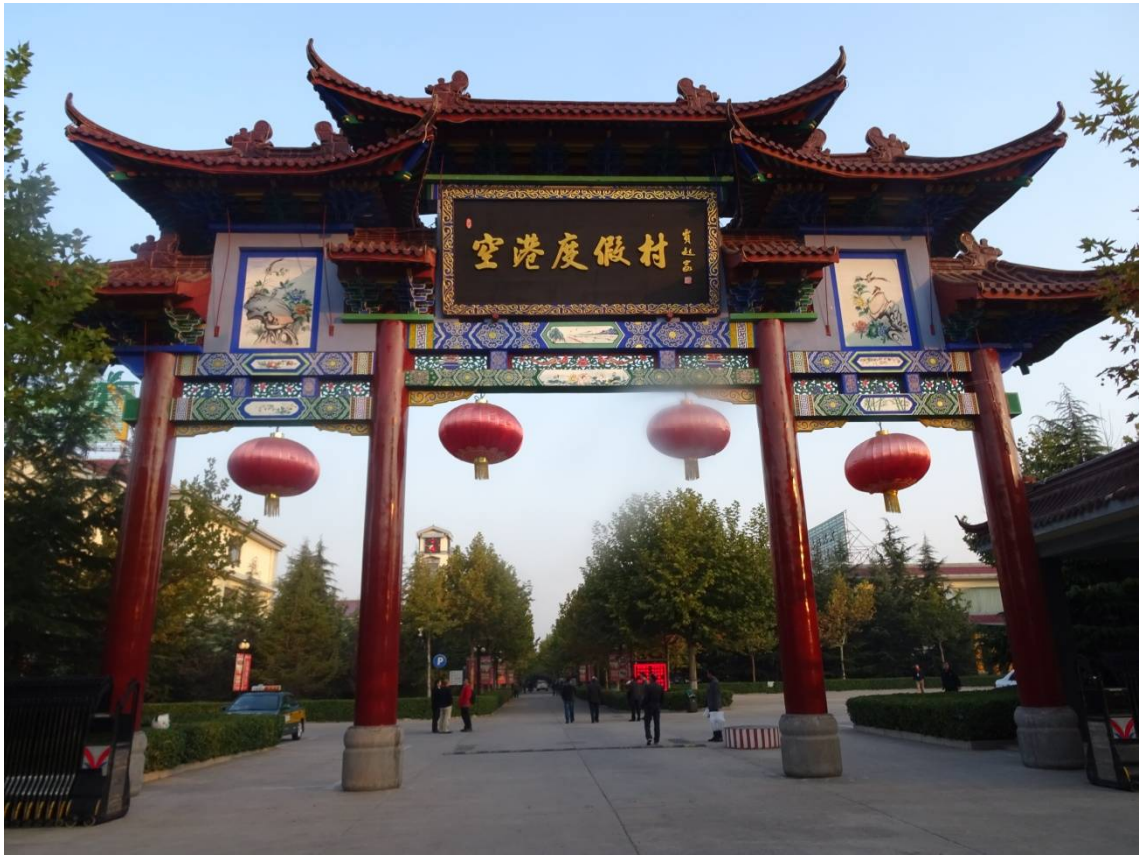
※運城学院の住所は、山西省運城市河東東街 333 号。キャンパスは広大。学院というが総合大学。サイト「学習資料：運城学院」によると：運城学院の前身は 1978 年 5 月に開業してからの学生募集の運城師範学校。1989 年 12 月、運城師範学校と運城教育学院、河東大学（お金）合併を運城高等専門学校。2002 年 2 月、国家教育部通知山西省人民政府、正式認可、運城学院設立。2014 年 5 月によると学校の公式サイトによると、この学校の敷地面積 2818 ムー、教育と研究の総機器 10956.3 万元、所蔵図書 126.29 万冊紙。教職員 1139 人が、全日制普通当専科の在校生 19581 人。

到着は名前を告げ、参加者名簿にサインするだけで ok。戸崎哲彦君（島根大学教授）と同じ 1306（三階）に部屋はなっていて、とまどった。荷物を持ってちょっと部屋に入っただけで、たばこのにおいで頭が痛くなった。あと、香港から来た梁樹風さん、復旦大学出版社元社長賀聖遂さんらと夕食。後から、万徳敬さんと会の運営の世話をしてくれる院生たち

も参加。賀さんに汪涌豪（復旦大学中文系教授）が友だちで、岡山大学で開いた国際シンポに来てもらったこともあるといったら、すぐに携帯で電話してくれて、久しぶりに汪涌豪とと話すことができた。また、吉川幸次郎先生の話が出て、自分の恩師であり最後の学生（関門弟子）だといったらすごく感心してくれ、大いに気があい、その他の話でも盛り上がって、白酒を何度も乾杯した。

いい気分で 1306 にもどると、戸崎君、部屋を別々にすることを提案。「先生、たばこ吸わないでしょう。窓をずっと開けてたんですよ」。もちろん、別の部屋にすること、おれも考えていたから、すぐに二人で一階に降りていくと、万徳敬さんまだいた。部屋は 1103（一階）になってこの件解決。11 時半ころに就寝。この夜は、無線でのネット接続がうまくいったのだ。それが、次の日からはうまくいかなくなる。

１０月３１日（土）



ホテル入り口。「渡假」はバカンスの意。

ホテル。この一階左奥の 1103 室に泊まった。

７時、ホテルの大レストランで朝食（朝餐券でなく房卡[部屋カード]を pc に認識させる方式)。食事はバイキング。色んな野菜が色んな調理法で出ていた。７時半過ぎにバスに乗って、運城学院へ。

右上に空港「運城関公機場」、左上に運城学院。

会場入り口。会場はこの五階。

８時半頃から、開幕式。運城学院の学長・尚永亮柳宗元学会会長等の祝辞があって、記念撮影。

前列：左端から戸崎哲彦・李寅生・賀聖遂・梁樹風・？・蔡自新・運城学院学長・尚永亮・李浩・陳松柏・郭万金・下定・万敬徳

９時半～10 時半、円卓討論の第一組。おれの発言は最後。時間は一人数分。来年夏に、『杜甫全詩訳注』を講談社学術文庫として出版する話をした。第二組は１０時半から。戸崎君が最後に発言した。柳宗元は、唐代の偉大な詩人、思想家などと言われているが、世界的な偉大な思想家だというべきだ、ということを発言した。彼の最近の版本研究についても発言しかけたが、これは時間がなかった。円卓発言が終わったところで、李寅生さん（広西大学教授）が挨拶に来てくれた。

持ってきた本は、李寅生さんに『白居易と柳宗元』（岩波現代全書、2105）・『中唐文学研究論集』（中華書局、2014）を渡した。賀聖遂さん（元復旦大学出版社社長）にも。尚永亮に『白居易と柳宗元』。万徳敬さんと蔡自新先生（中国柳宗元研究会秘書長・永州市柳宗元研究学会会長）に『中唐文学研究論集』。

会期中にもらった本を記しておく。

李寅生さんから、李寅生編著『日本漢詩精品賞析』（中華書局、2009.5）、吉川幸次郎著・李寅生訳『読杜札記』（鳳凰出版社、2011.2）、今場正美著・李寅生訳『隠逸与文学』（湘潭大学出

版社、2013.3)、松原朗著・李寅生訳『中国離別詩形成論考』(中華書局、2014.1)、石川忠久著・李寅生編訳『中華旅吟』(中国青年出版社、2014.11)。

王志清さん(南通大学教授、王維研究会副会長)から、王志清撰『王維詩選』(商務印書館、2015.4。極めて売れ行きがいいらしい)。

梁樹風さん(香港中文大学講師)から、梁樹風導読、王晋光・梁樹風訳注『東坡志林』(中華書局[香港]、2014.5)。

祁世坤先生(柳宗元研究会理事)から、祁世坤著『柳宗元文化研読』(安立文出版社、2014.7)。

万徳敬さんから、明・袁凱著、万徳敬校注『袁凱集編年校注』(上海古籍出版社、2015.3)

ホテルにもどって、昼食。朝と同じバイキング。１時半前まで、少し昼寝した。１時半に朝と同じバスに乗って出発。分組討論。おれは１組で、1505 教室。

司会をする田恩銘教授（黒竜江八一農墾大学）と李芳民教授（西北大学）

この日に発表かと思っていたが、もともと２日目に組まれていた。発表の初めは尚永亮。論題は「柳子厚書法造詣与承伝論略」と李芳民の「柳宗元的釈氏題材文類写作及其価値」。発表は二人がペアになっていて、尚永亮は李芳民の発表について、李芳民は尚永亮の発表について批評することになっている。以下、梅華・馬暁斌、蔡自新・関永利、陳松柏・何如敏、王良・柳哲の諸氏が発表して、香港から来た梁樹風さんの柳宗元の花木詩に出てく

る薬草についての研究「柳宗元所植草薬名目考」と、趙俊波さん（四川師範大学副教授）の朝鮮への影響を論じた発表「論柳宗元辞賦在海東的伝播与接受」で終わった。

あと、時間があるので構内参観。広くて驚いた。ぐるりと見てまわるのに、小一時間はかかったか。

構内の一部

６時半頃、バスに乗ってホテルへ。

夕食、初め適当に坐っていたら隣の席に莫道才さんが坐った。桂林の広西師範大学の教授。来年９月に散文学会を開くので是非と誘われた。考えましょうと答えておいた。しばらくして、学院長や尚永亮、蔡自新さんらが坐る席に移動させられた。

山西省名物の火鍋

李寅生さん、夕食後、部屋に来て、『白楽天の愉悦』の訳の出版の事確認。とにかく、出版社で契約文書を作成して、送ってくれ、印税はいらないので、問題は何も無いはず、それだけを何度も強調した。大丈夫でしょう。

１１月１日（日）

前日と同じ。７時に朝食。バイキングで、おかずを取る時に、莫道才さんが復旦大学の出身で孫昌武先生（前柳宗元研究会会長、かつて鹿児島大学に勤めていたころ鹿児島まで講演に来てくれた）の学生であることを知り、急に親近感が湧いた。

７時４０分頃にバス出発。１組は、何人かが欠席、あるいは別の組での発表に代わって、１０時ころに発表になった。初めに田恩銘さんが、書・啓を材料として柳宗元の志について発表、論題は「従献啓之作看柳宗元的以文用世之観念」。その後おれの発表、論題は「柳宗元「商山臨路」詩写作時地初探」*。好評だった。尚永亮の意見。１、大荔県に山はない。２、なぜ長安を後にして、南方に左遷されるのに「背商顔」というのか？３、詩の内容・感情はやはり、永州から長安に帰る時のものだと思う。

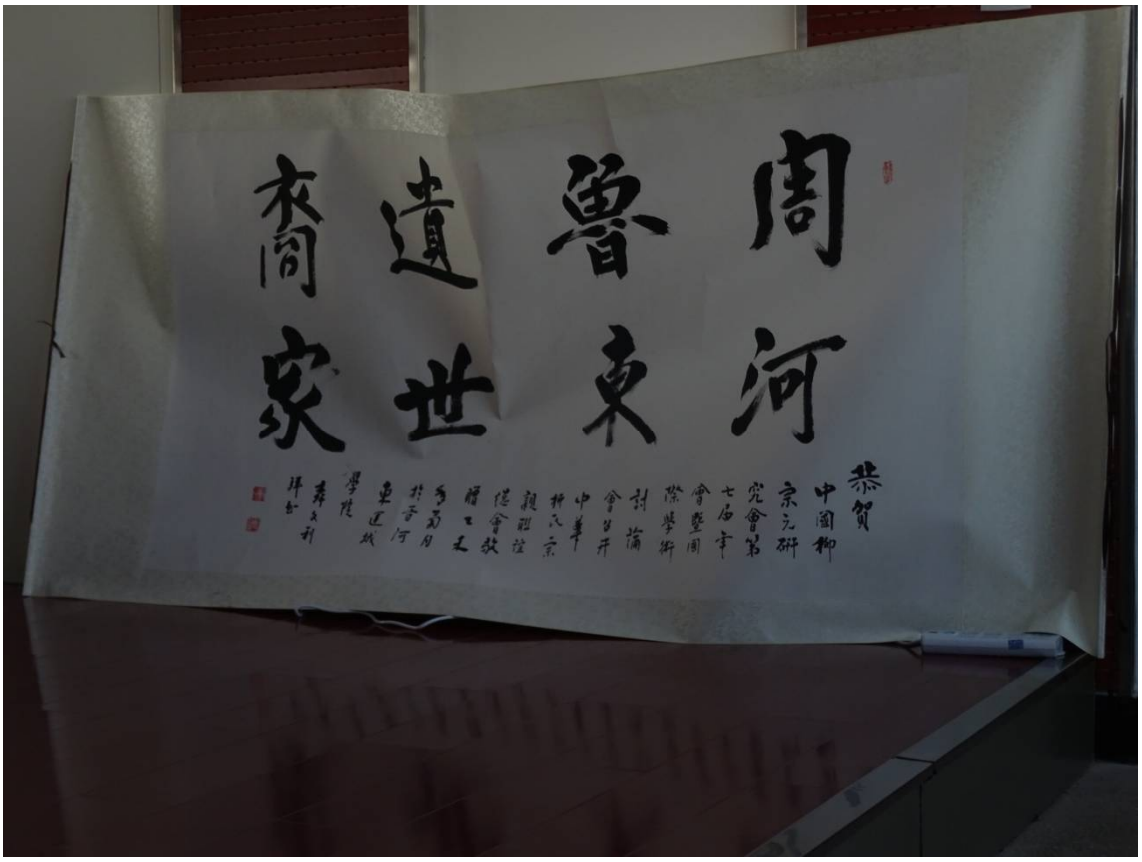
※拙文の内容については「発表した拙論」の pdf を参照されたい。

田さんも詩の内容については、尚永亮とほぼ同じ受けとめ方だった。驚いたのは、論文中に尚永亮批判の資料として挙げていた『劉禹錫詩編年校注』（黒竜江人民出版社、2005）の著者高志忠教授が亡くなっていたこと。田さんの恩師だったのだ。

討論終了後、閉幕式。

閉幕式の演壇

三つの分組での発表･討論の内容を、一組は梅華さん（江蘇第二師範学院、博士後）が、二組は郭新慶教授（元遼寧師範大学教授）が、三組は莫道才教授（広西師範大学）がまとめて報告。この後、莫山洪教授（広西師範学院）が、『会議論文集』の論文について注目すべき点を指摘。柳宗元の後裔が書を学会に献上して、そのお披露目。



最後に学会の運営のお世話をしてくれた運城学院の教員・院生たちに感謝の拍手をして閉幕式は終了。

運城学院の教員・院生たち

閉幕式を終えてホテルにもどり、昼食。

１時半から、考察と称する観光。十数人が参加。バスに乗って、ガイドさんに 100 元を払った。

ガイドさん　しっかりした顔の人だった

陕
西
省
河
运城市
黄河文化旅游区

観光は舜帝陵・関帝廟・塩池。地図、運城市の西北方に舜帝陵、西南方に関帝廟、関帝廟から運城市に行く途中に、中国の死海といわれる塩池。2007 年 10 月、同じく古名河東の永済での第四回柳宗元学会の時は、地図左下、永済市の西、黄河の東に在る、大鉄牛・普救寺・鸛雀楼に行ったのだった（本 hp、「3 学会日記」の「2 永済日記」を見よ）。

舜帝陵*に着いたのは２時半頃。３時２０分にはバスにもどるようにとガイドさん言ってたが、３時２５分にもどったおれが一番早かった。

*舜帝陵。山西省観光局のサイトからそのままコピー：帝陵は運城市の西北の鳴条岡上に位置し、国家 4A 級の観光地で、全国重点文物保護単位であり、全国一回目の旅行文化模範地であります。舜帝の陵墓は禹の時代に始まり、舜帝の陵の廟は党の時代に建造され、観光地の中、最も早く、規模の大きな、影響力のある文物旧跡であります。歴史、文化、美学、風土人情、建築工芸などの文化的な内包は非常に豊富で、非常に珍しいものであります。舜帝陵観光地の敷地面積は 1778 ムーで、観光区域と陵墓区域に分かれ、観光地は舜帝広場、神道、百花園、植物園、暦山、条谷蒼野、雷沢湖、妨汭河及び遊園地、猿山等で構成され、観光地内に松と柏が青々とし、数多くの花が美しさを競い、波うち、あぜ道が縦横に交差し、水系景観が南北を貫通し、皋、夔、稷、契四つのアーチが山紫水明の景色を一望のうちにおさめることができ、北方園林建造者の知恵が現れています。

舜帝陵遊覧略図

舜帝陵入り口

舜帝像を背景に、莫道才さんと

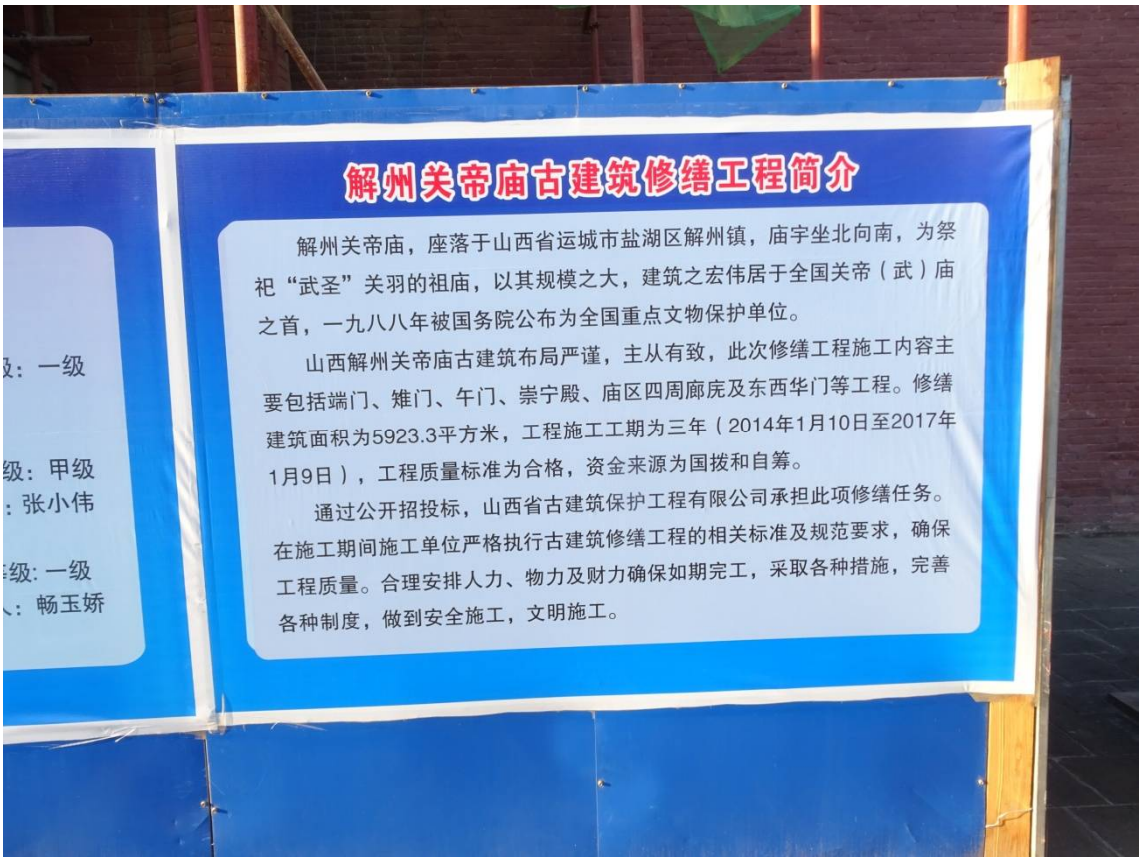
関帝廟*に向かったのは、もう３時４５分頃。４時半前に、着いたか。

*解州関帝廟。山西省観光局の hp から、そのままコピー。「解州关帝廟は山西省運城市解州鎮西関に位置し，南は偉大で秀麗な中条山と隣接し、北には万ヘクタールの青波の塩池、廟宇楼閣と鏡のような湖と青々した山が相映っている景色で、輝きあい、 「中華武廟の冠」の美称があります。隋の开皇九年（紀元５８９年）に創建し，宋と明の時代で修繕と拡大し、清の時代、康熙四十一年（1702 年）、火事に壊れ、十数年かけ回復し、現存する廟宇には南と北の両部分があり、南は結義園で、北は正廟であり、南北の長さは 700 メートル余り、東西の幅は 200 メートルもあります。敷地面積は 14 万平方メートルで、殿宇楼閣は 200 間余り、規模は巨大で、気勢が広大であります。中国の古代文化の重要の構成部分として、広大の歴史博物館である上に、輝かしい芸術殿堂でもあります。 関帝廟の建築分布はわが国の伝統的な「前朝後寝」で、中軸で対称な宮殿式の配置であります。関帝廟は昔から観光の勝地であり、全国の最大の関帝を祭る場所であり、観光客と信者の往来が絶えず、線香の火が旺盛であります。数回の修繕と色彩上絵を通して、関帝廟はもっと壮麗で、輝かしくなります」。

関帝廟入り口で。左から下定、尚永亮、李寅生/戸崎哲彦、莫道才

関帝廟

桃園の三結義に因む結義園。明万暦四十八年（1620）に創建されたが時を経て壊滅。これは清乾隆二十七年（1762）の建立。



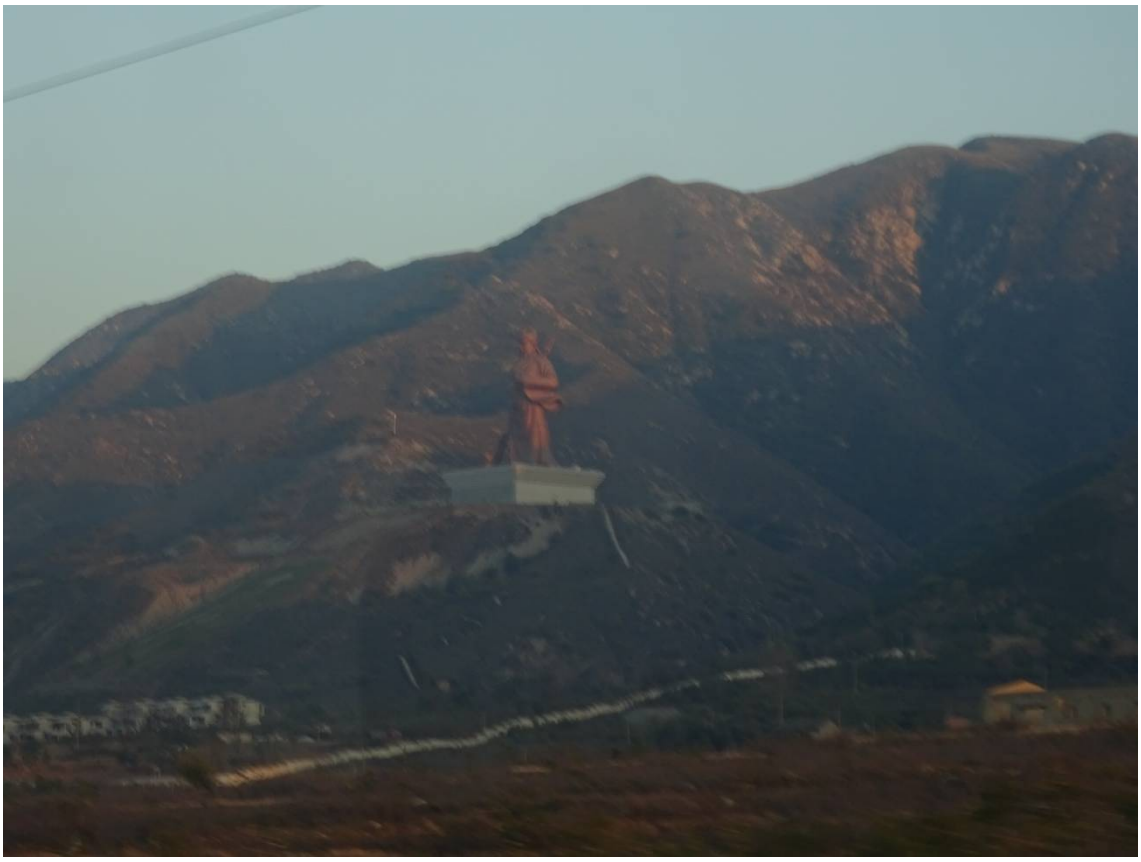
幾つかの門を修理中、その工事日程の説明

雉門あたりか？説明するガイドさん

ガイドがでっかい足跡を踏んでいる。関羽の足跡？らしい。

関帝廟を出たところの街の風景

５時２０分頃、バスにもどり、塩池へ。



関公祖陵の中国最大の関羽像。塩池へ行く途中、走るバスから撮った。

塩池*には６時前に着いた。

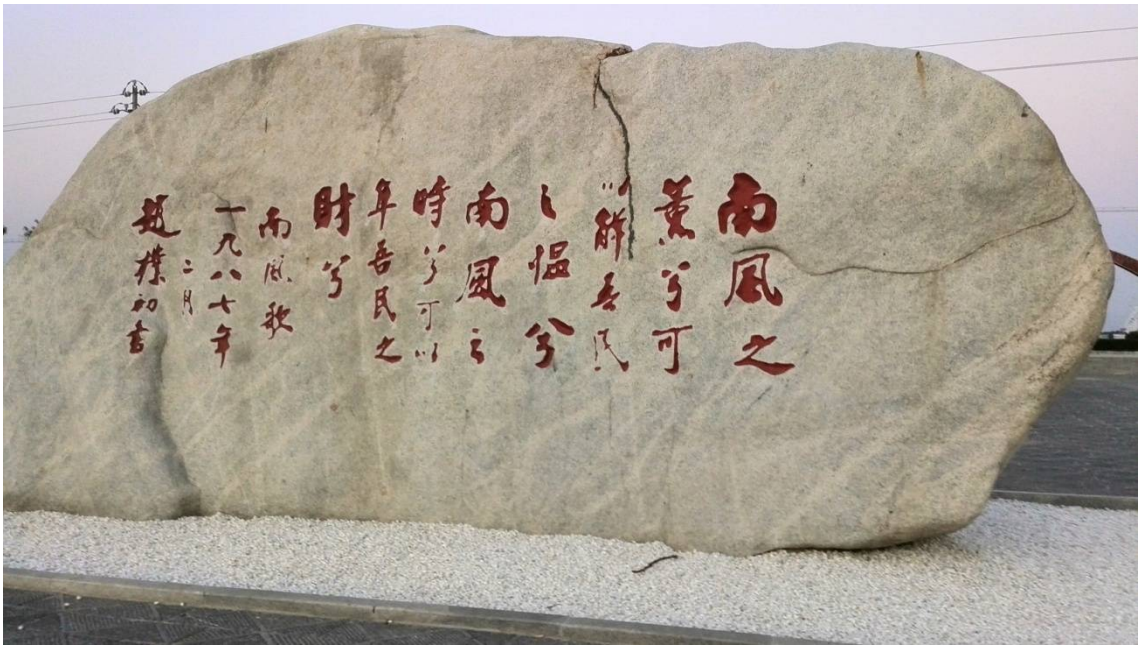
*塩池。サイト、山西省運城市　「中国の死海」とも呼ばれる塩湖から：山西省で最大の湖であり、「中国の死海」とも呼ばれれる運城塩湖は、山西省西南部の運城市にあり、世界３大内陸塩湖の一つである。多くの硫酸ナトリウムなどの鉱物質を含み、長い期間の沈殿や蒸発により天然の塩湖が形成された。封建時代に運城塩湖の塩税は、全国の財政収入の８分の１を占め、中華民族の繁栄に大きな貢献をもたらした・・・

ちょうど夕陽が沈む所で美しかった。この前にカメラの電池が切れて、莫さんに湖を背にして立っている所を写してもらった。メールで送ってもらう約束をした。

塩池。郭沫若の書。莫道才さん撮影（以下同じ）。

夕陽の塩池。

塩池の夕陽を眺めて。



趙僕初（中国仏教協会会長）の書。

ガイドさんは、ホテルに帰る途中で降りた。６時半過ぎにホテルにもどり、いつもとはちがう２階の部屋で夕食。始まったのは７時を過ぎていたろう。万さんが、明日の観光のことや、領収証のことで、皆の問題を解決した　あと、１、部屋代について聞くといらないという。甘えるしかない。２、空港が近いから朝の見送りは不要。この二つのことを確認した。右隣に坐っていたのは、郭新慶さん。年はおれよりも２歳わかかった。大連の

遼寧師範大学の教員だった。まもなく柳宗元評伝を出すという。出版社は？と聞くと、まだ決まっていないという。大丈夫かなあ。出るんでしょうか。左隣が李寅生さん。ずっと、尚永亮と話していた。お爺さんが、東大の法学部だったかを出ているらしい。それもあって、翻訳で中日の交流に貢献したいという気持ちが強いという。この時、尚永亮から、日本の唐代文学研究のいい論文を厳選して、中国語に訳した本を出そうという提案があった。

８時半ころには、宴会引けて、部屋にもどった。またネット接続を試みたがダメ。フロントに行って、服務員に来てくれるように頼んだ。今回は、１５分くらいすると、ネット関係の服務員がやってきて、すぐにテレビの裏に隠れていた線を出して、それを挿すと通じた。

で、ほっとして、ホテル前のコンビニに行き、白酒小瓶、パン一つ、康師傅（ｶﾝｼｰﾌ）の紅燒牛肉麵（1996―1997、北京大学に在外研修でいた時、初めの数か月、うまくて毎朝食べて、身体をこわした）を買ってホテルにもどってくると、賀さんとばったり。毎晩散歩して寝るのが習慣らしい。で、しばらく空港の方へ歩いて、またもどり、「『杜甫全詩訳注』が出たら、すぐに翻訳しますよ」と言ってくれたり、吉川幸次郎先生のことを話したりなどして別れた。寝たのは１０時４０分頃。めざましを５時１０分に合わせた。

１１月２日（月）

５時１０分に起床。紅燒牛肉麵は、お湯の温度が低くてうまくなかった。四分の一くらい食べて棄てた。６時半にチェックアウト。５分で、空港に。７時半ちょうどに搭乗開始。８時前に離陸。９時１０分に北京空港に着いた。フライトは、CA1140。荷物を取って、搭乗手続きだが、これが始まるのが、４階のH6で１時５分とのこと。３時間半も時間がある。荷物を２階の「行李寄存処」に３０元で預け、４階の中華料理の店で、チャーハン・もやしと干豆腐炒め・スッポン？のスープ、二鍋頭の小瓶を頼んで１１時４０分くらいまでねばった。この時に写真の不要のものをほぼ消し終えた。あとカウンターH6の前で、日記を書く。１２時半ころ、荷物を取りに行き、またH6の前に並ぶ。やはり日記を書いて時間をつぶした。１時５分になると、突然、H5から「こっちに来い」。搭乗券（飛行機はCA0161）をもらって、国際出発入り口へ。この入り口が、国内出発に挟まれていてわかりにくい。もう覚えた。５９番ゲートに着いたのが２時前。腹はいっぱいだが、この暗い何もないところで３時半までいる気はしない。レストランの有るところまでもどり、店を物色したが、あっさりしたラーメンを食える店はなく、また５９番ゲートに降りるところの待合までもどってきて、日記。途中居眠りして、いま３時１０分だ。しんどい、しんどい。小便して、５９番ゲートに行こう。

結局北京空港で9時過ぎから15時過ぎまで、６時間待機だ。15時半、搭乗開始。後は順調。20時過ぎに関空着。帰宅は10時前。